



園だより

令和6年10月1日
目黒区立第二上目黒保育園長

ある日の、4歳児クラスの子とのトイレでの会話です。

子ども：「先生、○○ちゃんね（自分のこと）、ほいくえんが だいすきなんだ」

「保育園が大好きだなんて嬉しいな。どうして今、その話をしようと思ったの」と質問すると…

子ども：「だってさ、まだ先生には言っていたでしょ」

思いもかけない場所での思いもかけない言葉でした。「保育園が大好き」…保育に携わる者にとって何にも代え難い言葉であり、嬉しさとともに子どもを預かる責任の重さを感じる言葉でもありました。周りの友達、大人たち、お気に入りの玩具、秘密の場所、楽しみな給食等、全ての子にとって保育園の『大好き』がこの先もずっと続くことを目指して、後期の保育を組み立てていく時期です。年齢ごとの発達の理解をより一層深めるために、職員間はもとより保護者の方ともお子さんの『今』を共有することを大切にしていきます。そして何より、子どもたちの魅力や無垢な可愛さをたくさん語り合える半年間でありたいと思っています。場所はトイレだったけれど、お尻拭きの手伝いの最中だったけれど、ずっと忘れない出来事になりそうです。

蝉の声をも遠ざけるほど暑かった夏がようやく過去になりつつあります。10月19日（土）は中目黒小学校にて2~5歳児クラス参加対象の運動会を開催します。大好きな保護者の方に見てもらいたいと張り切り、本番に向けて楽しく取り組む姿にたくましさを感じます。様々な運動が出来るようになる喜びは心の育ちへとつながり、運動遊びだけでなく日頃の仲間関係にも良い変化をもたらしています。心と体は密接だと子どもたちが教えてくれます。

内科健診（全園児）
運動会（2~5歳児クラス）
芋掘り遠足（4・5歳児クラス）
お楽しみ会（全園児）

中旬 身体計測 避難訓練



つ・ぶ・や・き

「あれ・・・数が合わないぞ」

わいわい
ひまわり組（5歳児クラス）

現在、ひまわり組の在籍は18名です。ある朝、当番の子に登園している人数を数えてもらいました。保育士が「今日のひまわり組の人数は18人です。全員揃っているか確認してください」と伝えると、当番の子は確かめるように一人ひとりの肩に触れながら数えます。ちょうど1名トイレに行っている子がいたので、その場にいるのは17名が正解ですが「1・2・3…17人…あれ、おかしいな」「（もう一度自分を入れて数えて）18人、先生みんないました」と報告していました。“トイレに1名いるのになあ”と保育士が思ったタイミングで、トイレに行っていた子が戻ってきました。すると「あ、19人。みんなで19人です」と自信を持って報告していました。何故か人数が増えてしまったひまわり組の不思議なお話です。

触れて 笑って 気持ちほぐれる

～ 乳児クラス触れ合い遊びの様子 ～



つぼみ組（0歳児クラス）

『きゅうりができた』という触れ合い遊びを楽しんでいます。子どもをきゅうりに見立て、歌いながら塩を振るようにパッパッパと指先で体に触れたり、板すりをするようにキュッキュッと足をさすったりします。最後に子どもの手を合わせて「おててぱっちんいただきます」をすると、その先を期待した表情で保育士を見つめています。少し間をおいてからお腹や頬を食べるようくすぐると声をあげて笑い、体をよじって嬉しそうです。その様子を見ていた子が“わたしもしてほしい”と寝転び“一緒にやろうね”的気持ちで笑い合っています。触れてもらう心地良さやくすぐったいという感覚を楽しみながら、安心して身を任せている子どもたちです。



保育士と一緒に、穏やかな気持ちで触れ合う遊びの時間を大切にしています。

ちゅうりっぷ組（1歳児クラス）

リズム遊びで取り入れている『お舟はぎっちらこ』という遊びを子ども同士でも楽しむ姿が増えてきました。保育士が歌を口ずさむと、近くにいる友達に手を差し伸べて「一緒にやろう」と誘っています。誘われた友達も「いいよ」と快く手をつなぎ、体をシーソーのように前後に揺らして楽しそうに笑い合っています。「嵐だ～」と荒波を表す場面で体を大きく揺らすのも大好きで、倒れこみそになる程相手を揺らして大笑いしています。楽し気な声に誘われ、周りで見ていた子も「一緒にやろう」と次々に集まることで、何組もペアが成立します。

これまで保育士との間で感じていた触れ合い遊びの心地良さや楽しさに“友達ともやってみたい”という感情が加わったことによって、関わりの広がりを感じます。

これからも、触れ合い遊びを通して安心感や面白さを十分に感じられるようにしていきます。



たんぽぽ組（2歳児クラス）

ホールでの活動に向かった時のことです。何かのはずみで床に落ちた小さなボールがありました。「あれ、ピンクのものがあるよ」と気付いた子どもたちですが、ボールまで距離があったためそれが何だかわからず、不安でホールに足を踏み入れようとしませんでした。ボールだとわかっていた保育士が恐る恐る近づく演技をすると子どもたちにもその気持ちが伝わり、期待と“あれはなんだろう”という気持ちが入り混じった表情で見守っています。ボールを手にした保育士が生き物のように動かしながらピンクのものを差し出すると、ある子が閃いたように「蛇かもしれない」と言いました。その言葉を聞いてドキッとした子どもたちは一斉に後ずさりし、しばしみんなのハラハラ、ドキドキが続きます。よ～く見てから、どうやら蛇ではないと安心したようでしたが、それでもまだ怖さの残る気持ちでそっと触っていました。その後「な～んだボールだよ」と何とも言えないホッとした表情とともに笑いも起きました。

イメージする力が伸びる2歳児時代と言われています。子どもたちの“なんだろ”“どうしてだろう”と想像する楽しさにつなげ、保育士や友達との心の触れ合いを続けていきます。

